

- 中野亜里編. 2005. 『ベトナム戦争の「戦後」』め
こん.
徐 京植. 2006. 「道徳性をめぐる闘争—ホー・
チ・ミンと『革命的単純さ』」『季刊前夜第1
期』6: 81-89.
Bui Tin. 2003. Nhung suy tu va uoc nguyen dau
nam ve to quoc, *Hiep Hoi so*3. (評者未見)

河合香吏編. 『集団—人類社会の進化』
京都大学学術出版会, 2009 年, 364 p.

水谷雅彦 *

本書は、東京外国語大学アジア・アフリカ
言語文化研究所における共同研究「人類社会
の進化史的基盤研究 (1)」の成果報告であ
り、2005 年から 2008 年にかけて延べ 21 回
にわたって開催された研究会が元になっている。
序論と終章の間に 4 部構成、計 13 本の
論文と数本の短論によって成っている本書の
特質は、なによりそのタイトルに表れている。
「集団」という、一見身も蓋もない単純
なタイトルは、編者のなみならない自負の表
現であると思われるのである。人間の集団に
関する学問的研究は、社会学や人類学の誕
生以前からも、長い歴史をもっている。し
かし、たとえばその表題に、ただ単に「社
会」とか「共同体」とだけ記された書物がプ
ラトンやアリストテレス以降存在したであ
うか。それらの語を部分として含んだタイ
トルをもつものは、名著と呼ばれる古典的書
物を含めて数多くあり、現在もまた大量に生

産されている。しかし、それらが、ヒトが
「集まる」という単純な事実を起点として論
じているかどうかには疑いが残る。たしかに
アリストテレスは、ヒトや動物が集まるとい
う単純な現象に注目することからポリスとい
う共同体に関する考察を開始した。ただ、そ
れ以降の「理論」の多くは、その抽象度の洗
練さの度合いに応じて、このおそろしく単純
な事実から語り始めることが次第に少なく
なっていくように思われる。編者の河合香
吏は、本書の執筆陣の誰も「コミュニティ」
という語を使用していないということを半ば
誇らしげに記している。「いきなり抽象的な
社会なるものについて語るのではなく、その
構成要素であり、基底の実在である集団から
出発する。集団なる現象の具体性に賭けるの
だ。」という「序章」における河合の宣言は、
まさに本書全体に通じる通奏低音となっている。

では、そのような「集団」論は、どのよう
な視点によって遂行されるのだろうか。河合
によれば、これまでの社会学や社会・文化人
類学におけるコミュニティ論との最大の差異
は、「進化史的時間軸」というものを考慮す
るか否かにあるという。この進化史的スケ
ールでの長期の視点ということは、河合の研
究歴を考えれば当然のことであろう。それは伊
谷純一郎という霊長類学の世界的権威の下で
学んだ河合（そして本書の論文執筆者の過半
数を占める、伊谷と後継者である西田利貞の
門下生）にとっては、欠かすことのできない
基本的な態度であった。しかし、ヒト以外の
野生霊長類を研究対象とする通称「サル屋」

* 京都大学大学院文学研究科

にとっては当然の視点であり、また現在は進化史的議論から距離をとりつつ個別社会の詳細な記述と分析を行なっている「ヒト屋」と呼ばれる（生態）人類学者たちにとっても意識せざるをえない論点ではあっても、共同研究者であり論文執筆者に含まれる第一線の文化・社会人類学者たち（たとえば内堀基光、船曳建夫、田中雅一など）にとっては、ただちに共有される論点ではなかったと思われる。文化・社会人類学者と霊長類学者、生態人類学者とのコラボレーションということに関しては、これまでも京都という場のたぐいまれな特徴として存在していた。なかでも谷泰に牽引された京都大学人文科学研究所におけるコミュニケーションに関する長年にわたる共同研究は、現在、菅原和孝に引き継がれ、多くの成果をあげ続けている（ちなみに書評子も長らくその末端メンバーであり、同じくメンバーである高田明の誘いが、本稿執筆のきっかけとなった）。そのなかで、本書の決定的な特質はどこにあるのだろうか。

そのひとつは、ある意味では意外なことに、日本における社会哲学の中心人物であり続けた今村仁司の存在であった。晩年の今村は、田辺繁治の主催する国立民族学博物館における共同研究に参加するなど、急速に人類学の領域に接近していった。本書の元になった共同研究と今村との関わりについては、河合の「序章」の他に西井涼子が「追悼文」のなかで詳しく紹介しているが、理論的には、今村が『交易する人間—贈与と交換の人間学』において主張した、〈society〉から区別された〈social〉という概念がキーワードと

なる。今村によれば、「society は《social》によってはじめて存在可能になる。それなしには社会が社会になりえない何か、それが《social》である。ここで言う「社会」とはいわゆる市民社会であり、実際には、経済、政治、法律、イデオロギーの複数の『自立的な領域』から成り立っている。そうした具体的な社会関係の領域が育ってくる土台または基礎を《social》という。《social》は、他のすべての社会関係が関係として可能になる社会形成力または「社会の絆」である。」つまり、いまだ構造化されざる集団はもとより、すでに「社会」として構造化されたそれにおいても、ヒト（あるいはサル）のつながりの基底ではたらくものが、今村によっては、たんに〈society〉の形容詞形であるにとどまらない〈social〉と名づけられていたのである。

この今村の発想に伊谷門下の俊英たちが共鳴したということそのものは意外ではない。霊長類の社会構造に関する研究で著名な伊谷は、その晩年においては、「孤猿（ヒトリザル）」と呼ばれるニホンザルの若オスや、異種の群れの集まりである「混群」に関して「非構造」ということを論じていたのである。「混群」にみられるような他者に対する「そこはかとない関心」に基づくゆるやかな絆には、集まるということ以外になんの構造的なものを見いだすことができない。しかし、この構造以前の集まりこそがすべての構造的社会的進化的な可能性の条件として存在しているのだ（この点については本書の足立薫論文が詳しく論じている）。これが今村の〈social〉と直ちにリンクするものであること

はいうまでもないであろう。伊谷と今村という、全く異なるディシプリンに属する希有の知性が、生前に「集団」について語り合ったことはなかった。本書は、その想像するだにスリリングな「対話」を、次世代の研究者が実現してみせたものであるともいえる。ただ、両者の視点も、古くは制度的な〈civitas〉と区別された〈societas〉概念にさかのぼることが可能であろうし、人類学の領域での先駆としてはターナーの〈communitas〉の概念をあげることもできよう。書評子もまた、伊谷や今村とは若干異なった視点から、ジンメル〈Geselligkeit〉やマリノフスキーの〈phatic communion〉、あるいはヒュームやオークショットの〈conversation〉に着目しつつ、制度的（構造的）な規則によって規定される以前の、つまり民主主義的な「議論」や「対話」に先立つ「会話」的コミュニケーションの基底性を論じたことがある。その意味では、伊谷と今村の「出会い」は、今なお量産され続ける凡百の「共同体」論に対する重要な異議申し立てにつながるとしても、全く新奇なものではなく、むしろ必然的であったとすらいえるだろう。しかし、その必然が本書によって現実化されたということに大きな意義があることにはまちがいない。

ただ本書の執筆者たちの名誉のために記すならば、本書の諸論文は、伊谷や今村の学識と発想にインスパイアされこそすれ、けっしてそれに追隨するだけのものではない。たとえば、曾我亨による、東アフリカ牧畜民の、もはや「集団」と呼ぶことすらできない一時的な「まとまり」についての考察や、寺嶋

秀明による、狩猟採集民における「バンド」の、制度や規則によって定義することのできない「今ここの集団」としての再評価は、それぞれのフィールドワークに基づく新しい知見を与えてくれている。また、床呂郁哉と河合の論文は、それぞれフィリピンにおける海賊と東アフリカ牧畜民の略奪（レイディング）について、これまでの暴力論の枠をこえて、「暴力の行使を通じて自己産出される集団」（床呂）、「一時的で偶発性に委ねられた集団」（河合）というユニークな視点を提供している。とりわけ河合のそれは、黒田末寿による、霊長類の「集団的興奮」に関する本書所収の論考とリンクするだけに興味深い。これら以外の諸論文も、「社会」や「共同体」を直接の考察対象とした場合にはみえにくい現象に関する多くのユニークな考察に満ちており、「共同体」に回収されない「共同性」のありかたを示すものとしての『集団』というタイトルの選択の適切さを証示しているといえるだろう。

ひとつだけ気になった点としては、「進化的基盤」を謳いつつも、「進化」そのものについての明確な視点が必ずしも共有されてはいないかにみえるということをあげることができる。この点では、今なお強力な理論でありつづけている「社会生物学」的な視角に対する対抗軸を期待する者にとっては肩すかしをくうかもしれない。とりわけ、社会・文化人類学者たちにとっては「進化」を語るにあたって、そのディシプリン特有の学説史という問題もからんで、ある種の逡巡を隠しきれなかったようである。終章で内堀基光

が、やや苦しげに「集団を（歴史的にはなく）超時間的に論じる」ことと「進化」について論じることとの関係について語っているのは象徴的である。しかし、これは本書の欠陥を示すものではなく、この端倪すべき共同研究がきわめて誠実なスタートラインを引いたと解釈するべきであろう。すでに開始されている「人類社会の進化史的基盤研究（2）」は新たに「制度」という困難な課題をメインターゲットとしているという。本書で開始された「進化」に関する議論の真価は、まさにそこで再度問われることになる。その成果が大いに待たれるところである。本書評では、本書のもうひとつの成果であるヒトの「表象能力」に関するいくつかのすぐれた考察については、紙幅の都合上触れることができなかった。関連する諸論文の執筆者のご寛恕を乞わねばならないが、北村光二のそれに代表されるこれらの諸論考もまた、ヒト「集団」に特有の「制度」に関する議論のなかであらためてその意義が確認されることになるだろう。

池野 旬、『アフリカ農村と貧困削減－タンザニア 開発と遭遇する地域』京都大学学術出版会、2010 年、410 p.

上田 元*

アフリカの農業・食糧問題は、開発援助が重視している貧困削減の中心にある。しか

し、その実態は、外在的要因、たとえば国際的潮流に縛られつつ実施される国家開発政策、干ばつ、政治不安、価格変動だけでは説明できない。それに加えて、地域の農民が国家を当てにせず模索している自立的な生存戦略を分析することが、この問題の実像を明らかにするために不可欠なことである。豊富な調査歴をもつ著者は、タンザニア北東部・パレ人社会の地域研究者として、本書においてこうした「地域の主体性」を明らかにしようとする。それによって、開発経済学をはじめとする「開発諸学」が大陸・国家レベルの集計データをマクロに分析しながら描く悲観的な農村像と、地域研究がミクロ分析によって見出す楽観像の間の「ミクロマクロ・ギャップ」を埋めることが試みられている。

著者のいうギャップとは、そうした分析レベルのずれ、それがもたらす現状認識の隔たり、そして「地域社会の独自世界」を肯定的にとらえる地域研究者が、頻繁に転換される国際標準化した開発理念・方針に対して持つ違和感を指している。こうしたギャップの創出には、地域の現場でデータを生み出している地方行政が関わっている。1980 年代中頃に始まる構造調整政策や 90 年代末以降の地方分権化によって、県や集落、さらには地方都市のような「地域」が果たしうる役割の重要性が増してきたという認識のもと、それは「世帯／個人と国家／国際社会との間、すなわちミクロとマクロとをつなぐ種々の中間項」（p. 15）、「外部に対して開放的でありながら同時に外部の経済変動に対してなんらかの緩衝材として機能するもの」（p. 234）と

* 東北大学大学院環境科学研究科